



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ダニ・マニア, 島野智之(著), 八坂書房, 2012年12月25日刊行, 215pp., ISBN 978-4-89694-143-2, 1900円+税
Author(s)	柁原, 宏
Description	書評
Citation	タクサ : 日本動物分類学会誌, 34, 83-84
Issue Date	2013-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67773
Type	article
File Information	Taxa34_83-84.pdf



ダニ・マニア：島野智之（著）

八坂書房 2012年12月25日刊行 215 pp.

ISBN 978-4-89694-143-2 1900円＋税

「ウミグモのイイ画像があったら送ってくれないか？」とメールで依頼を受けたのが2012年11月。「いま校正している本の中で使わせていただきたいんです」との由。「いま校正している本」の内容はろくに確かめせず、まゝ、人様のお役に立てるならばと二つ返事で引き受けて画像を送信すると、この件は評者の記憶からはすっかり消え去った。翌月、年の暮れも迫った頃、とある要件で評者の研究室を訪れた著者は、はにかみつつカバンからごそそと本書を取り出し、「これ、差し上げますから書評をお願い出来ませんか？」——すっかり忘れていたが、件のウミグモ写真が掲載された本がもう出版されたのかと軽く驚嘆しつつ手にしてパラパラと眺めると、それは第2章「ダニの正体」の中、鋏角類におけるダニの分類学的位置を解説した節において、サソリ、カニムシ、ヒヨケムシ、ウデムシ、サソリモドキ、クツコムシ、ヤイトムシなど普段目にしない蛛形類の写真の後にカブトガニと並んで用いられていた。写真の提供依頼を受けた時点では皆目見当もつかなかった著者の意図がこのとき初めてわかり、分類学者としての著者のアイデアに大いに得心したものである。巻末に分類体系や標本作成法が掲載されている点にも分類学者である著者のこだわりが伺える。

タイトルは「ダニ・マニア」。「ニ」と「マ」の間にある中ボチは単なる点ではなく、4対の歩行脚と1対の触肢を備えたダニが意匠されており、表紙カバーに大きく描かれた館野鴻氏の手による詳細な点描画のダニ・イラストをそのまま縮小して塗りつぶしたもののようにも見える。副題は「チーズをつくるダニから巨大ダニまで」、帯には「カッコいい！これがダニ？手のひらに乗るもの、森で落葉を食べて暮らしているもの。フランスでは“チーズ職人”として働く、のろまな平和主義者。ダニは、知れば知るほど不思議な生き物。さて、その正体は？」、その背には「希少図版150点！」とある。感嘆符と疑問符を多用した刺激的かつ挑発的な謳い

文句が踊る装丁だ。

書評を依頼され、年末年始に家で読もうと思いき食卓に置いておいたところ、表紙を見た小学生の娘たちは口々に、

「お父さん、この本なに？」

「わっ、ダニ！ キモーい」

「えーっ！ チーズってダニがつくってたの？」

「わー、無理。もう私チーズ食べれない」

一応彼女たちの誤解は解いておいたが、同時に、一般的な感覚をもった（特に若い女性の）読者層に本書がどれほど受け入れられるのか、評者が心配する筋合いではないものの、乗り越え難いであろうその障壁の高さを想像せずにはいられなかった。巻頭のしょっぱな、目次を繰ったその直後から本書には爆笑面白ネタ・エピソードが随所に散りばめられているのであるが、食卓でゲラゲラ笑いながら本書を読む評者を見て、台所に立っていた妻は「そんなに面白いの？」と微笑んで訊ねはしたものの、その後数日間食卓の片隅に暫し置かれていた本書を彼女が手にすることはついになかった。

カミングアウトの書、であるらしい。女子学生比率の高い教育大学に勤務する著者は、着任以来ダニ学者であることをひた隠しにしてきた。「なぜなら、赴任してすぐの授業でダニの話をしたときに、目の前の女子学生がなんともイヤな顔をしたから」（p. 5）。自身の専門を尋ねられた際の答えは「微生物です」「微生物生態学です」（p. 5）。しかも、ひとたび「研究室を離れると、研究者同士の電話でさえ『アレ』などと隠語を使わずを得ない（p. 31）のだというから、そのストレスたるや相当なものであったことがうかがわれる。しかし、ダニ研究者であることを秘匿し続ける生活にこれ以上耐えることの出来ない瀬戸際にまで追い詰められた著者は「好きなものは好きなんだと言おう」（p. 5）と決意を固める——「私はダニが好き」（p. 6）。もはや一般的な感覚をもった若い女性読者層の獲得などはハナから念頭にない、自暴自棄とも思える捨て身の勝負で臨んだ渾身の一作なのである。通例であれば献辞などが掲載される前付には、菅原道真が詠んだ「心だに誠の道にかないなば、祈らずとても神は護らん」（心さえ誠の道にかなって何らやましいところがなければ、ことさら祈らなくてもおのずと神の加護がある

であろう)が、「だ」と「に」に傍点付で引用される。奇しくも運命的なその2文字を含んだ道真公の句が、本書執筆に踏み切った筆者の心中をかくもエレガントに代弁しているとは……(大爆笑)。

上掲の句を冒頭に持ってくるウィットもさることながら、読者の想像をかき立てる筆致や巧みな喩えが秀逸である。いわく、

「乱暴な言い方をすると、脊椎動物は内骨格で支えられている「串だんご」のようなもの。一方、節足動物は、外骨格で支えられている「缶詰」のようなものだ」(p. 37)

「考えてもみてほしい。自分の顔の横に、拳ほどもあるダニが付いたまま離れない。このダニを捕まえようとすると、手の届かない頭の上に登ったり、背中に回ったりして、どうにも捕まえることができない。(後略)」(pp. 77-78)

「ダニと同じ外骨格の生き物であるカニの脚を想像してほしい。今、自分の足が、カニの脚になったと思っていただきたい。自分の足のまま、カニのような硬い殻を持っているわけだから表面は何も感じないし、何かをぶつけても痛くはない。(後略)」(p. 139)

「カニを食べるときのことを思い出してほしい。カニの身(筋肉)を食べるとき、あなたはきっとカニの脚を持ってバキバキと脚を折り、そこからカニの身を取り出して(ほじくり出して?)食べているだろう。(中略)身体の硬いササラダニを食べるコケムシも同じことをする」(p. 158)

警報フェロモン発見の顛末を臨場感たっぷりに描いた後半章は、未来のダニ学、あるいはより広く自然史科学・多様性生物学・分類学を担うことになる若い世代の読者に向けた胸のすくような清新なメッセージである。ササラダニを求めてウラル山脈のタイガ・ツンドラを始め世界中へサンプリングに赴く著者の活躍で締めくくられる本書を読んで心動かされた少なからざる若者たちが、将来ダニ研究をはじめとして広く生物学に興味と関心をもってくれるであろうことを思うと、本書が世に出たことは誠に慶賀に耐えず、著者の執筆のご苦労を心からねぎらい

たいと思う。

弟子をダニ学に奪われた(と当人は思っているフリをしている)海産無脊椎動物研究者の物した恨み節(に見せかけた諧謔的な文章)が本誌(No. 32: pp. 55-56)に掲載されたのは記憶に新しいところである(そして評者に身近なこの師弟の間に何らの怨恨関係もないことはここで明らかにしておきたい)が、顧みるにダニ研究者の著わす一般書には「若者にやる気を起こさせる」(*ibid.*)ような名著が多いように思われるのは評者の気のせいだろうか。教養部にいた学生時代、大学図書館に蔵されていた『ダニ学の進歩—その医学・農学・獣医学・生物学にわたる展望』(佐々学・青木淳一【編】1977年・北龍館)、『ダニのはなし—生態から防除まで』(江原昭三【編・著】1990年・技報堂出版)、『ダニと病気のはなし』(江原昭三・高田伸弘【編・著】1992年・技報堂出版)などをワクワクしながら読んだことが思い出される。本書もまたダニ学の名著に列せられることは疑いなかろう。

帯の背にある謳い文句「希少図版150点!」であるが、「本書で使った走査型電子顕微鏡写真は、その多くを南三陸町立自然環境活用センターにあった走査型電子顕微鏡で撮影させていただいた。(中略)2011年3月11日に、東日本大震災が起きた。千年に一度と言われる大きな津波が、東日本の500キロにわたる沿岸部を襲い、宮城県の海岸線は、なかでもとりわけ被害の大きい地域となった。(中略)同センターは、変わり果てた姿となり、走査型電子顕微鏡も田んぼで発見されることになった」(p. 194 あとがき)事を知り、思わず目頭を押さえた。書評の本旨からは逸れるが、次回の日本動物分類学会第49回大会は著者が大会実行委員長を務め、宮城教育大学で開催される。その理由は「復興しつつある東北地方を是非見てもらいたいから」という著者の心意気であったと仄聞している。大会が大成功となることを強く願い、評者も力の限りその応援をしたい。

柁原 宏(北海道大学理学研究院)